

第2章 保幼小連携・接続研修

第2章では、第1期に引き続き、“学びの連続性と円滑な接続について学び、「連携・接続」の在り方を考える”を共通のテーマにして、6名の先生方に講演していただいた内容の概要を掲載します。

また、第2期の研修会では、当センターから“小学校と就学前施設との「連携・接続」取組状況等調査”の結果報告”や、“保幼小連携・接続推進事業「平成30年度・令和元年度 取組まとめ」冊子の紹介”、新型コロナウイルス感染症拡大防止対応の状況下での「保幼小連携・接続研究」の1年目の取組紹介等も行いました。

第2章－1 令和2年度 保幼小連携・接続研修

1 「幼児期の学び・育ちを小学校での学び・育ちにつなげるためには…

～「連携・接続」取組状況等調査から今後の取組を考える～

講師：奈良教育大学 横山 真貴子 教授

実施日：令和2年10月26日 会場：大阪市立東成区民センター

(記録：大阪市保育・幼児教育センター職員)

(1) 事務局より“小学校と就学前施設との「連携・接続」取組状況等調査”の結果報告

〔第1章 小学校と就学前施設との「連携・接続」取組状況等調査 参照〕

(2) 研修の主な内容

① “小学校と就学前施設との「連携・接続」取組状況等調査”の結果を踏まえて

文部科学省の幼児教育実施調査では、「連携・接続」のステップを0～4（計画なし、検討中、交流、教育課程の編成、改善）の5段階に整理している。高い割合を占めていたステップ2（交流）が年々減少し、ステップ3・4（教育課程の編成・改善）が増えている。

大阪市の「連携・接続」取組状況調査結果は、小学校が回答しているところ、「連携・接続」している施設で私立保育園の割合が高いところ、教師が保育参観を行っているところなどが特徴である。他地域ではなかなか取り組みにくい点をしっかり取り組んでいる。効果では、就学前の子ども理解につながったが88%と高い反面、幼児教育の内容・方法の理解につながったのは38.2%と低い。今後の取組に期待したい。課題としては時間確保が81.1%と高く、今後、オンラインを取り入れることも方法のひとつとなるだろう。今後の取組予定は、維持・継続が82%と多い。今やっていることを維持することも重要である。100をめざすとすると、まだまだと思うだろうが、全国的に見て大阪市の先生方は頑張っている。

「連携・接続」を進めるために、①教育の特性を相互に理解する。幼児教育はその後の教育の方向付けを重視し、小学校教育は具体的な目標への到達を重視する。②連携・接続の体制を作る。まずは人と人がつながる、そのことで課題を共有することができる。そして教育課程の編成・実施につながる。今やっていることから始め、良かったことを続ける。③教職員が意識的に「連携・接続」に取り組む。幼児期と児童期の教育課程・指導方法の違い、子どもの発達や学びの現状を理解する。児童期を見通し、また幼児期を踏まえて教育を実施することが大事である。子ども一人ひとりの学び・成長を見ていくことも大切である。



②小学校と就学前施設との「連携・接続」の今後の取組を考える～古賀（2020）をもとに～

連携は組織同士の協力関係（交流）、接続は内容のつながり（教育課程の編成）。お互いの教育目標や内容・方法を知る。違いには必ず意味がある。そして接続のために、言葉で整理しながら自園所を見直す。

子ども観の捉え方も違う。子どもをどう見ているか。引き算ではなくプラスの見方ができているか。保育ドキュメンテーションを作成することで、子どもの育ちや学びを可視化し共有することができる〔平成30年度・令和元年度保幼小連携・接続研究Cブロックまとめ参照〕。同じキーワードで保育・教育を見ていくのも一つの方法である。集まるだけでなく、一つのテーマを中心に各校園所で取り組む〔平成30年度・令和元年度保幼小連携・

接続研究Dブロックまとめ参照]。

スタートカリキュラムについては、とにかくやっていることを全て書き出し、並べてみる。それを振り返ることからカリキュラムは作られる。コロナ禍の中で、保育を見直し、今必要なことは何か、今だからできることは何か、問うてきていると思う。今だから新しいものを作りやすいこともある。主体性は、子どもだけでなく大人にもある。

③これからの取組を進めていくために

幼児期の学びは小学校教育への準備ではない、土台である。小学校教育はゼロスタートではない、幼児教育の上にある。この時期にしかできないことを考える。土台とは何かを考えることが大事である。

京都市・横浜市の事例から、「連携・接続」は子どもの幸せのために、つなげたいのは「心」、一番大切にしたいのは「子どもの心の育ち」、小学校として子どもの発達と学びのために大切にしていること、それを幼児教育でやっているのか自分たちに返す、長いスパンで一人ひとりの成長のために取り組むことの大切さが分かる。

④まとめとして

連携・接続は子どもの幸せのために、そしてできることから、何がしたいかを考える。自園所の連携・接続は、自園所で考える。「私たちの一歩」を踏み出す。自分のことを知り、相手を理解することが重要である。カリキュラム作成は新しいことをするのではない。これまでやってきたことを並べ、つなぐ。それが第一歩。大阪市の先生方は頑張っている。

(3) 研修後のアンケートから (参加人数 149人)

- 理解できたか 肯定的回答 94%
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 94%
- 活用できるか 肯定的回答 95%
- 感想 (小：小学校 支：支援学校)

- ・「連携・接続」は、子どもの幸せのため、子どもの心の育ちを大切につないでいくということに共感した。無理せずできることがあると考えることができた。
- ・大切にしたいのは、子どもの心の育ち。保育の原点として伝え続け学べる現場でありたい。
- ・保育を可視化する方法としてドキュメンテーションの活用を学んだ。保育のプロセスを写真などを活用することで、保育の見直し、子どもの育ちの確認や発見につながるといった。
- ・就学前教育と小学校教育の違いは、必ず意味・理由・ねらいがある。お互いを理解し考える必要性を改めて理解した。
- ・準備ではない、土台である。スタートではなく活かしてつないでいく。18歳までつながっている。そのための重要なポジションとして流れの大切さを学ばせてもらった。(小)
- ・今年度は交流ができなかったと思っていたが、自分たちがしてきたことを見直すことも大切と知り、なるほどと思った。「土台」「遊び込む」ということの大切さを知った。(小)
- ・支援学校は、小中高が自校にある。「連携・接続」がうまくできていない部分もあると思った。幼稚園・小学校の教育目標は、支援学校に活かされることが多いので、実践していきたい。(支)

2 「ボトムアップとしてのカリキュラム・マネジメント～幼児教育から小学校教育への発展～」

講 師：大阪教育大学 佐久間 敦史 准教授

実施日：令和2年11月26日 会 場：大阪市保育・幼児教育センター

(記録：大阪市保育・幼児教育センター職員)

- (1) 事務局より“保幼小連携・接続推進事業「平成30年度・令和元年度 取組まとめ」”について説明 〔当センターホームページ 参照〕

(2) 研修の主な内容

① コロナ禍でのボトムアップの教育

コロナ禍の中、学校によってはWEB授業が実施されている。これまでの学校生活が一変したことで、子どもが登校できることにさえ有難さを感じる。

ある学校のWEB授業では、教師が手話も使いながら授業し、支援を必要とする子どもへの配慮も大切にしていた。一人ひとりに手厚く授業をする教師の姿に、支援を必要とする子どもだけでなく、他の子どもたちも、もし自分が困ったときにはこの先生なら助けてくれる存在だという信頼と、教師の人権の理念が伝わる授業が行われ、困難の中でも工夫が見られた。しかし、WEB授業を続けることで、教育格差を招きはしないかが懸念される。

幼児教育を小学校教育につなぐ事例としては、色々な遊びを取り入れた分かりやすい授業を工夫したり、幼小が意図して公園で出会って遊ぶといった交流を取り入れたりする学校園もある。また、ファッションショーを計画し実施した学校では、計画や準備する過程をみんなで取り組んだことで、不登校の子どもが参加できたり、障がいのある子どもの理解にもつながったりするなど、一緒に過ごすことができる環境の工夫による効果も得られたという報告もある。6年生の花火大会の事例では、子どもたちが自分たちでできることから考え、地域の方々を巻き込んで協力を得ながら実施し、達成感を味わうことができた。

これらの事例からも、子どもたちが幼児期に自分で考え、自己決定できる経験をたっぷりとしてきたからこそ、成長するところまでできるようになると言えるだろう。連続する教育の中で、幼児教育から小学校教育へ、小学校準備教育ではなく、何をボトムアップすることが望まれるのかを考えていただきたい。

② 「学力」をめぐって

今、学校教育は大きく変わっていくことを求められている。国連・SDGs 前文には「質の高い教育をみんなに」と唱えられ、幼児期の教育の重要性はますます高まっている。

幼児教育では、自発的な活動としての遊びを中心とした生活を通して、一人ひとりに応じた総合的な学びが展開されている。保育者は戸外での子ども同士の関わり合いや、自然とのふれあいを経験できる環境を構成するなど、幼児の自発的な遊びを生み出す保育の探究と、保育者がこれまでの経験則として継承・蓄積された指導の技術の可視化を図ることも求められている。

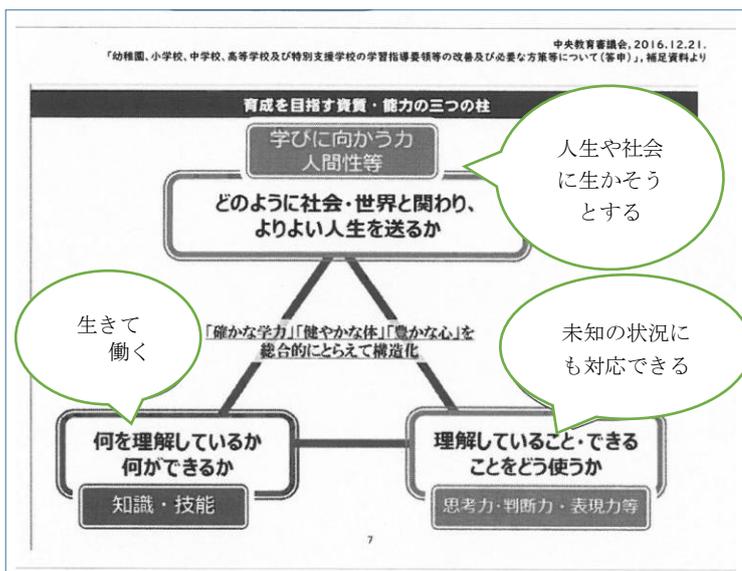
一方、小学校新学習指導要領では、これからの社会を創り出していく子どもたちが、社会や世界に向き合い関わり合っていくために、学習する子どもの視点に立ち、教育課程全体や各教科等の学びを通じて何を育むのか、18歳の段階で身に付けておくべき力とは何かを考



えながら、教育を進めていくことが求められている。

③幼児教育から小学校教育への発展

小学校学習指導要領解説生活編には「総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育で生かすことが、小1プロブレムなどの問題の解決につながる」とある。小学校の先生方が、幼児期の遊びから育まれる経験を知り生かすことが必要であろう。小1プロブレムの要因(生活環境)の解決として、幼児期に遊びを通して子ども同士が関わり、人間関係を築く経験を重ねることが挙げられる。孤立する親の子育ての



未熟さへの支援の中で、親も子も自尊感情が低いという点については、しっかりとほめて自尊感情を高く保つことができる教育が必要である。

④おわりに

ボトムアップの教育課程において、「幼児教育はすべての教育の基礎」であり、遊びを通して総合的なスキルや非認知的スキルを学ぶ。ゆえに、保幼小連携を進めていくことが重要である。

幼児教育は、学校教育の下請けではないこと。また、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」(教育基本法) こと。幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、健やかな成長のために「適切な環境を与え、その心身の発達を助長することを目的とする」(学校教育法) こと。これらのことをしっかりと、心にとめて取り組んでいただきたい。

(3) 研修後のアンケートから (参加人数 80人)

- 理解できたか 肯定的回答 90%
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 96%
- 活用できるか 肯定的回答 96%
- 感想 (小：小学校 支：支援学校)

- ・幼児教育の大切さを改めて感じた。幼児教育はAIに代替できないということで、より日々の保育をしっかりと深め、子どもたちに寄り添い、応答的に関わり色々な経験や発見、気づきができるようにしたいと思う。
- ・子どもの思いを尊重し経験的、体験的な活動をしっかりと取り入れていかないといけないと思った。(小)
- ・今日の研修に参加して多くの気づきを得ることができた。課題や今求められる教育について、またこうしたモデルがあるという投げかけは大変参考になった。校内で共有したい。(支)

第2章-2 令和3年度 保幼小連携・接続研修

1 「子どもの視点から捉える保幼小連携・接続について」

講師：関西国際大学 椋田 善之 准教授

実施日：令和3年6月21日 会場：保育・幼児教育センター（オンライン研修）

（記録：大阪市保育・幼児教育センター職員）

(1) 事務局より“保幼小連携・接続研究 第2期1年目の取組”について報告

〔第3章 保幼小連携・接続研究 参照〕

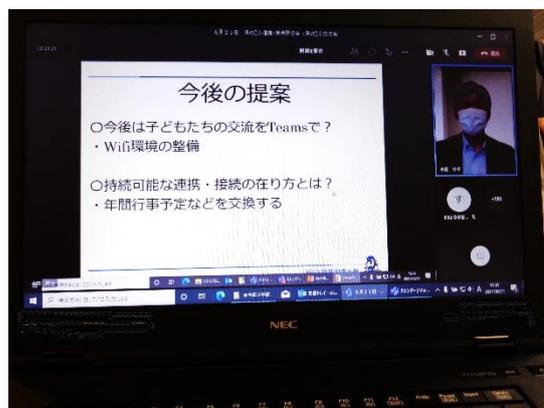
(2) 研修の主な内容

①各ブロックの取組から今後の連携・接続への提案

Aブロックでは、就学前施設の保育と小学校の授業の実践事例や写真から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[10の姿]を読み取る研修が紹介された。今後、この研修を重ねる中で、就学前施設の教職員は、子どもの遊びの中から学びの芽生えを捉え、小学校の教科学習や生活へのつながりを意識していくこと、小学校の教職員は、子どもたちの興味・関心から出発した教科学習への移行を考えていくことで連携・接続が深まっていくと思われる。

Bブロックでは、小学校の概要が分かるビデオレターを見た就学前施設の子どもたちの疑問や質問を拾いあげて小学校に伝え、それに対する回答を6年生が動画で作成していた。また、就学前施設からポスターを送付する等、コロナ禍の中での交流の方法を工夫されていた。今後、縦のつながりに加えて就学前施設同士の横のつながりも含めた、Teamsなどでの保幼小連携の深まりも考えられる。

Cブロックは、交流の基本である教職員間の交流から始め、互いに保育・授業参観をされ、小学校教員や就学前施設教職員の多くの気づきがあった。今後は子どもたちの交流をTeamsで行うこともできる。無理のない連携・接続をするために、年間行事予定などを交換して遠足等で空いているクラスを借りる等の工夫も考えられる。



②幼児教育の重要性

ヘックマン博士の研究で、幼児教育への投資は、大人になると約7倍が社会に還元されるという調査結果が出ている。質の高い幼児教育が認知能力と非認知能力の両方に影響を与え、学業や働きぶり、社会的行動に肯定的な結果をもたらすことが世界的にも注目されている。

③社会で求められている力とは

学生に求められる資質・能力は、文系・理系共に、主体性、実行力、問題解決能力である。幼児期の教育で大切にしている主体性が、小学校から大学までつながっている。小学校学習指導要領 第1章総則にも「主体性のある日本人の育成」とあり、「主体」という言葉は、学習指導要領に130回も出現する。いかに子どもたちが主体性を発揮し、社会を生きていく力を身に付けていくかが、就学前以降の教育でも重要となっている。

④今なぜ保幼小連携・接続なのか

連携とは、交流活動等、接続を達成するために互いに協力することで、接続とは、交流を通して双方の教育をつなぎ、円滑な移行を達成することである。保幼小接続は、1990年後半から言われている“小1プロブレム”への対応のために始まり、学校教育の機能強化、幼児教育の充実、保育者の資質向上、失われた子ども集団の復活、地域の教育力の向

上等をめざして実践していくことが求められている。

幼児教育と小学校教育の違い(特徴)は、幼児教育は方向目標であり、経験カリキュラムで学びの芽生えを育み、小学校教育は到達目標であり、教科カリキュラムで自覚的な学びを形態としている。幼児期の学びは見えにくく、各教科へのつながりをイメージしにくい

ため、見てもらう視点を定め、具体的に伝えてもらうことで分かりやすくなる。保幼こ小連携・接続を続けることで、小1プロブレムの発生率は年々減少している。円滑な連携・接続を行うにあたり、時間的問題があるが、なかなか会えない部分をICTで解決することもできる。TeamsやZoom等ICTが進むことで連携・接続にプラスになっている。

幼児教育・小学校教育の特徴(違い)

	幼児教育	小学校教育
教育課程の構成原理	方向目標 経験カリキュラム	到達目標 教科カリキュラム
教育の方法等	「遊び」を通した総合的な指導	教科等の目標・内容に沿って選択された教材によって教育が展開
学びの形態	学びの芽生え 学ぶことを意識していないが、楽しいこと好きなことに集中することを通じて、様々なことを学んでいくこと	自覚的な学び 学ぶことについての意識があり、与えられた課題を自分の課題として受け止め、計画的に学習を進めていくこと

兵庫県教育委員会、(2017) 幼児期と児童期の学びをつなぐ

⑤子どもの視点から連携・接続を捉える(出生順位から)…就学前、就学後にインタビュー

第一子の子どもと第二子以降の子どもが抱く小学校への期待と不安が違うのは、情報源が第一子は保護者や大人からで、第二子はきょうだいからのことが多いため、勉強に関する認識でも第一子は保護者から、なぜ勉強が必要か理由を得、第二子以降はきょうだいから具体的内容、勉強の内容を得ている。第一子と第二子以降の子どもの小学校の認識の差が大きいので、子どもの視点から連携・接続を考えることが必要である。保護者の子どもへの対応も第一子は初めて、第二子以降は上の子どもが通った道という思いがある。また通う園所でも進学先を占める割合により、保護者が伝える情報量が違ってくる。

子どもたちが「小学校が安全だ」と感じる場所にするために、また環境に対する不安感をなくすために小学校の写真を準備する。連携活動が難しいなら、数名で招待状を渡しに行く。質問内容をみんなで決めて校長先生にインタビューする。子どもの声に耳を傾ける。まずは教職員の交流から始める。等々無理なく持続可能な保幼こ小連携・接続を行ってほしい。

(3) 研修後のアンケートから (参加人数 112人)

- 理解できたか 肯定的回答 99%
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 97%
- 活用できるか 肯定的回答 99%

○感想(小:小学校 支:支援学校)

- ・3つの取組は地域性や規模の違いがあり、それぞれにコロナ禍の中で安全に連携・接続を充実させたり、地域に住む友達を近くに感じるための工夫があり、参考になった。
- ・自分の居場所をつくれることが円滑な教育の接続の基礎になることが理解できた。
- ・ICTの活用が施設間の立地や時間的問題の解消だけでなく、子どもたちがリアルな映像を見てイメージを広げ、就学への安心感につながるために、今後期待されると思う。
- ・保幼こ小連携・接続の事例を聞き、できることから始めようと思う。また、出生順位で子どもの期待・不安が違うということが、細かく聞いて興味深かった。(小)
- ・幼稚部と小学部の連携、地域の小学校との連携を進めるうえで参考になった。連携において、育むべき力や子どもたちの興味・関心を引き出す手立てを知ることができた。(支)

2 「学びをつなぐ保幼小連携 ～幼児期の体験と意欲を育む実践～」

講師：兵庫教育大学 鈴木 正敏 准教授

実施日：令和3年8月31日 会場：保育・幼児教育センター（オンライン研修）

（記録：大阪市保育・幼児教育センター職員）

(1) 研修の主な内容

①「令和の日本型学校教育」の構築を目指して

中央教育審議会答申（令和3年1月26日）に、「令和の日本型学校教育」として「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる必要があると示されている。

「個別最適な学び」とは、個に応じた指導を学習者の視点から整理した概念であり、子どもの成長やつまずき、悩みなどを理解し、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援していく学びである。

「協働的な学び」とは、個に応じた指導が孤立した学びに陥らないように、研究的な学習や体験活動等を通じ、子ども同士多様な他者と協働しながら他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるような学びである。一人ひとりの良い点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせたり、より良い学びを生み出すようにすることが大切である。

また、幼児期の教育に関する基本的な計画として、「幼保小の架け橋プログラム」を通じた全5歳児の生活・学習の基盤保障などが示されている。

②幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について

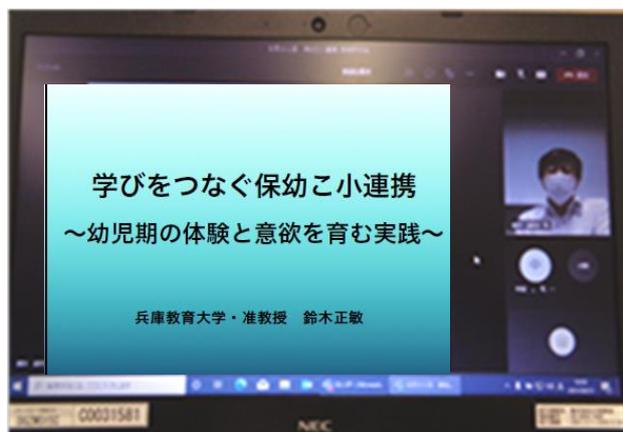
子どもの発達や学びの連続性を保障するため、両者の教育が円滑に接続し教育の連続性・一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的に行われるようにすることが極めて重要であり、その際一方が他方に合わせるものではないことに留意する必要がある。自覚的な学びへと至る前の段階として、「遊びにおける楽しさからくる意欲や遊びに熱中する集中心、遊びでの関わりの中での気付き」「調べる、比べる、尋ねる、協同する等の様々な手法を組み合わせる」「楽しみながら課題を見出し解決する取組」などを通して学びたい、知りたい、調べたいなどの意欲につなげていく。

③子どもの移行体験

子どもたちは、小学校に対して期待（勉強、身体的活動等）や不安（給食、友達、勉強等）をもっている。期待をもっている子どもは充実感をもつ可能性があり、不安をもっている子どもは不満に変わることが多い。また、期待をもっている子どもは、その内容や体験によって、不満に変わる可能性がある。子どもたちが、何に期待をもち、何に不安をもっているかを見極め、就学前施設から小学校への移行を支える取組が必要である。

④子どもたちに何が必要か？

子どもたちが協働（協働）して1つの目標に向かう実践や、子どもたちがそれぞれ興味・関心をもち「好奇心」を存分に味わうような実践から、情報を集める、試す、考えるなどして「探求」する活動を取り入れていく。思いやりや道徳性、前向きな態度、粘り強さなど、今しか得られない学びに向かう力を育むことが大切である。



⑤ たつの市の実践例（スタートカリキュラム）（パワーポイント資料より）

【たつの市】小学校 スタートカリキュラム 一部抜粋															
揖保地区小学校生活総合部会															
目的： <u>幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を意識し、1年生がスムーズに小学校生活に入ることが</u> <u>できることのできるカリキュラムを作成する。</u>															
方法： <u>スケジュールシートの内容欄に下記の番号を当てはめて、スタートカリキュラムをつくる。</u>															
4月（ ）日（ ）曜日 ※スケジュールシートは、期間を決め、各校で作成すること															
時間	1時間目			2時間目			3時間目			4時間目			5時間目		
	0~15	15~30	30~45	0~15	15~30	30~45	0~15	15~30	30~45	0~15	15~30	30~45	0~15	15~30	30~45
内容															
目標															

【I 返事やあいさつに関すること】		
番号	項目	先生の声かけの例
①	返事、あいさつ【道社】	○気持ちのよいあいさつは、どんなあいさつかな。 ○声のものさしに気を付けるといいね。（図を示して）
②	言葉づかい【社】	○みんなの前で発表するとき、どんなことに気を付けるかな。
③	職員室や保健室の入り方【社】	○幼稚園、保育所、こども園では、どのように先生の部屋に入っていたかな。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】 社 社会生活との関わり 道 道徳性・規範意識の芽生え

小学校に入学した子どもが、就学前施設での遊びや生活を通しての学びや育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくために、たつの市では、厳選した30項目をもとにカリキュラムを作成している。

⑥ まとめ

コロナ禍で交流活動に制限がかかっているが、基本は、一人ひとりの子どもの姿を、保育者、教師で共通理解することが重要である。1年生はゼロからのスタートではないことに留意し、子どもの体験を生かし、就学前施設と小学校の両方で、主体的、対話的で深い学びを実現して欲しい。

(2) 研修後のアンケートから（参加人数 76人）

- 理解できたか 肯定的回答 100%
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 97%
- 活用できるか 肯定的回答 100%
- 感想（小：小学校 支：支援学校）

- ・話し合いの中で保育者が主体となるのではなく、子どもが主体となるよう見守り、時には言葉をかけていくことの大事さを改めて感じた。そこから小学校に入学した時、様々な壁にぶつかっても自分たちで解決する時の力になっていくと思った。
- ・色々な経験を通して意欲的に活動し、「知らないことを知ることは楽しい」「新しいことに挑戦することは楽しい」と思える心を育てていきたい。
- ・大人が強引に交流にもっていくのではなく、園児の要望により交流ができるような連携を心がけ、よりスムーズに就学できるようにしていきたい。小学校の視点ではなく、就学前施設の視点の話が聞けたのでよかった。（小）
- ・幼児期と小学校の連携について「連携＝交流ではない」というキーワードが興味深く、研修内容では新たな発見があった。子ども自ら「調べる、比べる、尋ねる、協同する」こと具体例が聞けて、子どもたちが深く学んでいることを感じた。先生方も楽しんで関わっていることが理想だと感じた。（支）

3 「子どもの学び・育ちをつなぐ ～「連携・接続」の取組を通して～」

講師：大阪市保育・幼児教育センター 阪口 正治 所長

実施日：令和3年11月8日 会場：保育・幼児教育センター

(講義は対面とオンラインライブ配信、交流会は対面のみ)

(記録：大阪市保育・幼児教育センター職員)

(1) 研修の主な内容（就学前施設と小学校の「連携・接続」について、感じ考えていること）

①小学校勤務時代の「連携・接続」の捉え

当初、就学前施設と「教育内容や方法を接続する」という捉えはなく、行事や施設同士の連携にとどまっていた。校長になり、就学前施設の行事や保育を見る機会が増える中で「連携・接続」について これまでより関心をもち意識するようになったが、中学校との「連携」のイメージはもてても、就学前施設との「連携」を深めるイメージをはっきりもてなかった。



②成長の息吹

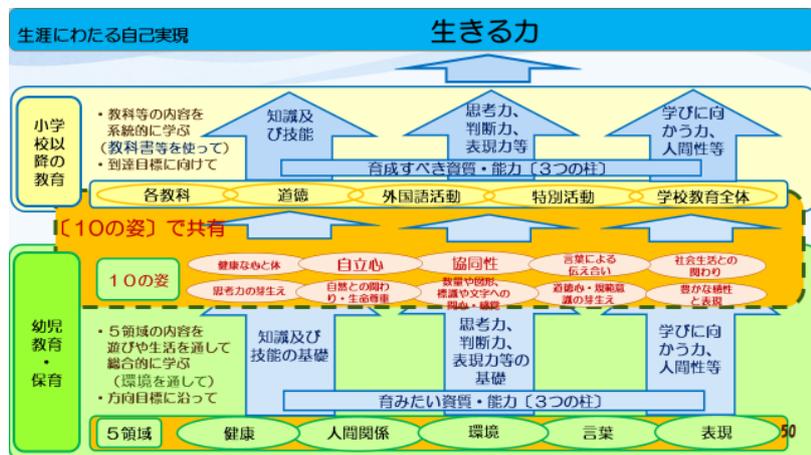
孫の育ちを目にし「成長の息吹」を感じ、また幼児教育・保育に関わり、「連携・接続」により関心をもちようになった。子どもは、誕生と共に「生涯につながる学び・育ち」が始まる。経験・体験の中での体の育ち、言葉の獲得や思考力等の芽生え、心の育ちは、個別のものではなく、互いに絡み合っただ総合的・一体的に生まれ、その子らしさが培われていく。親という安全基地から踏み出し、集団生活の「遊び」を通して、学び育つ。

③小学校以降につながる学び・育ちの姿（「ある幼稚園の一日」）

就学前の教育・保育には「個別最適な学び」の保障と「協働的な学び」の環境作りの原点がある。遊びに没頭できるように、その日の教育・保育の「ねらい」や「環境設定」「子どもへの働きかけ」の計画を立て、実践・検証・振り返りながら明日の教育・保育につなげる営みを積み重ねている。子どもたちは、就学前での学び・育ちを体全体に蓄えて小学校に就学していく。

④資質・能力の育成でつながる就学前教育と小学校以降の教育

資質・能力の3つの柱（『知識及び技能の基礎』『思考力、判断力、表現力等の基礎』『学びに向かう力、人間性等』）は「健康、人間関係、環境、言葉、表現」の「5領域」を総合的に育むことで一体的に育まれていく。子どもたちの学び・育ちは「資質・能力の3つの柱」によってつながり「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[10の姿]を就学前施設と小学校の教職員とが共有することで円滑に接続されていく。就学においては、[10の姿]を手掛かりに、子どもの学び・育ちを共有し、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である。



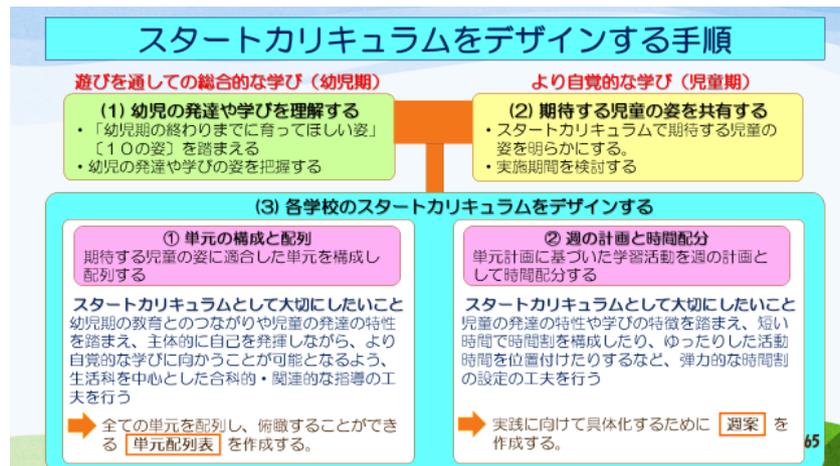
⑤保育・幼児教育センターの取組「保幼小連携・接続推進事業」

当センターでは「就学前施設と小学校との連携」や「就学前教育と小学校教育の円滑な接続」の重要性から平成30年より次の「保幼小連携・接続推進事業」に取り組んでいる。

- ・「保幼小連携・接続研究」
- ・「保幼小連携・接続研修」
- ・「保幼小連携・接続推進事業平成30年度・令和元年度 取組まとめ冊子の発行」
- ・小学校と就学前施設との「連携・接続」取組状況調査を実施（令和元年度）

⑥スタートカリキュラムの作成

平成30年3月に、文部科学省から「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」（スタートカリキュラムの導入・実践の手引き）が出された。幼児の発達や学びの特徴を理解することや就学してきた子どもたちに期待する児童の姿を明らかにすること、実際に作成する手順（単元の構成と配列・週の計画と時間配分についてのポイント）が示されている。



⑦小学校への就学を見据えた就学前施設の教育・保育の計画・実践

就学前施設の教育・保育の計画である「保育の全体的な計画」「月案」「日案」の中でも、小学校生活への円滑な移行に向けた「ねらい」や具体的な「働きかけ」「保護者との連携」の視点を踏まえ計画されている。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」〔10の姿〕や「育みたい資質・能力の3つの柱」を意識して実践する積み重ねが、小学校への円滑な接続の基盤になる。

⑧「連携・接続」に関する国の動向

現在、文部科学省の教育課程部会で「幼児教育スタートプラン」作成に向けて会合が始まっている。そこには「幼保小の架け橋プログラム」が示され、「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」で検討が進められている。改革の背景には、今の幼児教育をめぐる環境と現状への危機感がある。教育の格差をなくし、すべての5歳児が「学びに向かう基礎」を身に付けることをめざしている。今後、文部科学省だけでなく、厚生労働省や各自治体、教育・福祉団体が一体となって取組を進めることが欠かせない。幼児教育と小学校教育の間にある段差を幼・保・小が協力してスロープを作らなければならない。互いに見学し合ったり、連携したりしながら、相互理解を深める必要がある。

⑨「連携・接続」の更なる充実に向けて

- ・研修会に参加してみる。
- ・公開保育・公開授業の案内と参加の機会を作る。
- ・子ども同士の交流会では、相互のねらいを共有する。
- ・スタートカリキュラムを作る（小）小学校への就学を見据えた教育・保育を計画・実践する（就学前）

「連携・接続」の取組を通して、子どもたちの学び・育ちが一層豊かになっていくことを願う。

(2) 交流会（グループ交流）の意見より 参加人数 21人 （小：小学校）

- 隣に小学校があり交流しやすい環境にあるので、避難訓練や運動会など小学校へ行かせてもらっている。
- 指導案を共有することで発達につながると思う。
- 幼小交流カレンダー（5歳児と5年生）の取組を実施。資料で残し今後継続できるようにすることが大切。
- 「遊びで学ぶ」ことが小学校にはイメージしにくいのではないだろうか。気さくに話し合えば連携・接続の学びになる。
- 今年度、研究園としてTeams等を活用し交流している。卒園児が、本読みや計算など小学校で得意になったことやみんなに見てほしいことを披露したり、園児の質問に答えたりしている。卒園児の姿から小学校の良いイメージをもち、憧れや自信、力を発揮できる場所であることを保護者にも啓発したい。
- 小学校の先生が来られて「子どもがこんなにできると思わなかった。縦の関係がこんなに繋がっている。年長として頼もしい」とおっしゃった。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」[10の姿]を小学校につないでいきたい。
- 入学までにどのようなことを身に付けていけばよいかを交流した。（体育の着替え・和式トイレについて・聞かれたことに対してコミュニケーションをとり応えられる等）
- どんどん、学校からも「交流すること」を発信し進めていきたい。就学前施設からもアプローチしてほしい。（小）
- いろいろな環境から来た子どもをスタートさせる難しさがあり、連携・接続は大切。（小）



(3) 研修後のアンケートから （参加人数 80人）

- 理解できたか 肯定的回答 96 %
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 99 %
- 活用できるか 肯定的回答 98 %
- 感想（小：小学校）

- ・小学校との連携が「交流」だけでなく、就学前施設の保育内容、小学校での学習内容を踏まえた「連携・接続」になることの大切さがよく分かった。見通しをもったスタートカリキュラムを立てて、共通の認識をもって子どもの学びを支えていければとも思う。
- ・まずは地域の小学校の先生が5歳児の子どもの様子を見に来ていただいた時に、より取組を知っていただけるように、これまで以上に説明を行うことから始めていきたい。
- ・幼小が互いに歩み寄る取組だけでなく、様々な就学前施設での学びをどう共有していくのかなど、課題を改めて認識することができた。できることを探していきたい。
- ・新しい国の流れを取り入れた具体例も聞けて、とても分かりやすい研修だった。交流会では特に保育園の先生と話ができる機会が少ない中、短時間であったが貴重な充実した話の交流ができた。（小）
- ・「連携・接続」について具体的な生の声を聞くことができ、よかった。子どもたちの豊かな学びのために、0歳児～小、中、高へとつながる大切さを再確認できた。（小）
- ・幼児期から幼児期、学童期までの学びの連続性が整理でき、あらためてその学びのつながりの大切さと子どもたちの成長につながる流れを理解できた。小学校就学時のスタートカリキュラムを意識したカリキュラムの編成に努めていきたい。（小）

4 「特別支援教育の視点から、保幼小連携・接続を考える

乳幼児期から児童期の発達の課題を踏まえて～

講師：日本福祉大学 小野 尚香 教授

実施日：令和4年1月14日 会場：保育・幼児教育センター（ハイブリット研修）

（記録：大阪市保育・幼児教育センター職員）

(1) 研修の主な内容

①子どもの発達

子どもは、成長していく過程で、さまざまな側面の発達を示す。情動、運動、言語などそれぞれの発達は循環している。

発達障害とはそれぞれの発達の側面において、定型の発達を示さない場合であるが、「発達の障害を疑う」というより、発達の課題を考えていく。

②乳幼児期から児童期の発達課題

スキヤモンの発育曲線から見ても、神経系型は7～8歳までに急速に発達し就学前の育ちが大事なことは周知されている。デンバー式発達スクリーニング法の発達能力には、評価対象によって1年以上の開きがあり個人差が大きいことが伺える。感覚統合とは、聴覚、前庭覚、固有覚、触覚、視覚などを整理し、身体をコントロールすることであり、うまく行われていないと、身体のバランスをとることや微細運動や粗大運動が苦手になったり、言葉の発達にも影響を与えたりすることがある。

M. Lewisによると、3歳までは喜びや悲しみや恐れ、そして羨望や共感、罪や気まずさなどの情動をもつようになり、3歳を過ぎると強がったり我慢ができるようにもなったりするようだと言われている。一方で、最近は、自分に不安を抱き安心に欠ける子どもを見かけることがある。発達障がいと見ることによって解決しない場合に、愛着という視点から見ると理解しやすい場合がある。

③発達課題と愛着

愛着とは、乳幼児が養育者に対して形成する絆であり、その養育者は、不安・恐怖などの解消をしてくれる人で、安心・安全を確認できる人であることが大事である。愛着形成の3つの支援としては、養育、保護、手助けであり、そこから身近な人を信じる→自分を信じる→他者を信じる、というように心が発達していく。

愛着形成の行方として、学童期は愛着機能の内面化（親との愛着を土台に、もはや親にまわりつくことなく友達へ）、思春期は愛着機能の内面化であり、愛着が形成されていないと直接的な暴力や低い自己評価になることがある。

乳児期の愛着形成は、親を信じることから始まる。無条件に守られ思われているという感覚から、人を信じること、そして自分を信じることにつながる。幼児期は、家族・親族・先生との愛着形成から世界が広がり、自己と他者の関係性における共感や、会話・対話における言語発達などが育まれる。学童期になると愛着の働きが内面化していく。自分を信じることから、他者への許容性へとつながっていく。親から友達へ、家族以外の帰属意識が育まれる。思春期・青年期は、愛着機能の潜在化・成熟化の時期である。自分はどう見られているのか？自分とは何？と模索する中で、自分を信頼し他者を信頼し、社会的成員

愛着attachmentとは

- ・ イギリスの精神科医ボウルビィ, J. による
「乳幼児が養育者に対して形成する絆」
↑
- ・ 不安・恐怖・不快感の解消 = 安心・安全を確認
(泣いたら助けてもらえる)
- ・ 保護してくれる特定の存在との親和性
 - * そのひとだけ(特定)
 - * やりとり(相互)
 - * 精神的つながり(情緒)
 - * 身体的つながり(身体接触)
- ・ 愛着形成の3つの支援：養育(心身)、保護、手助け
→ 身近な人を信じる → 自分を信じる → 他者を信じる

Naoka ONO

としての価値を見出していく。

愛着（形成）障害とは、親側に大きな問題があり（例：ネグレクトなどの虐待はその一つ）、そのために形成されるべき愛着がうまく形成されないこと。一方、愛着形成の難しさとは、子どもの側に原因がある場合（例：自閉スペクトラム症）があるが、脳の機能障がいなどが考えられることから子どもの責任ではない。

自閉スペクトラム症の基本症状として社会性の障害、言語・コミュニケーションの障害、想像力の困難や、感覚過敏・鈍麻（聴覚・触覚・味覚・視覚・嗅覚・温度）があげられる。コミュニケーションの難しさとして、適切な場所で適切な意味を捉えられない、抽象的な言葉理解が苦手、見えていることや認識していることが拠り所になる場合があり想像・推測することが苦手、見えないものに対してイメージをもつことが難しい。その外にも、概念形成の弱さや中枢性統合の弱さがある。

④保幼小連携・接続を考える

個別の（教育）支援計画を作成し、小学校につなげることも大事である。作成にあたり、保護者も参加する（個別の支援計画策定に対する理解、保護者の願いを記載、専門職とのやり取り等）。子どものニーズに対応した支援を有機的、効果的に実施するための計画であり、子どものニーズ、支援の目標や方法、支援を行う者の役割、支援の内容や効果の評価方法などを記載する。それは子どもの暮らしの場（園、医療・療育の場など）すべてで

個別の支援計画作成

- ・保護者の理解が必要。
 - ・個別の支援計画策定に対する理解
 - ・保護者と一緒に作成
 - ・外部機関に問い合わせ：保護者の了承が必要
- ・子どものニーズに対応した支援を有機的効果的に実施するための計画
- ・子どものニーズ、支援の目標や内容、支援を行う者や機関の役割、支援の内容や効果の評価方法などを記載
- ・子どもの暮らしの場（園、家庭、医療・療育など）すべてが対象

作成可能である。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、全員が対象である。特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室で行われている特別支援教育の中の自立活動である。通常の学級においても、特別支援教育を必要としている子どもに対して自立活動の視点をもつことが大切である。目標は、困難の改善・克服であり調和的発達の基盤になる。

子どもたちの未来に向けて、子どもの成長発達の基底に、「自分の存在を大切に思える作業を支える」「自分を理解してくれる人と出会う」「自分が信じていることができる人に出会う」ことを大切にしていきたい。

(2) 研修後のアンケートから (参加人数 54人)

- 理解できたか 肯定的回答 98 %
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 96 %
- 活用できるか 肯定的回答 100 %

○感想（小：小学校 支：支援学校）

- ・愛着形成が心身の発達にどれだけの影響を与えるか、乳児期以降の発達にどのように表れてくるのかということなどを学べ、保育士としてこの愛着形成というものにどのように関わっていくべきかということをも改めて考える機会になった。
- ・「情動」を動かすことで、認知も含めすべて動き出すということをも改めて考える機会になった。また1つの発達の側面で捉えるのではなく、すべての側面が連動していることを、漠然とではなく捉えられるようにしていきたいと思う。
- ・教育職に就いた頃の初心を忘れ、子どもに学力や規律を付けたいという思いだけ強くなってきていることに気付かされた。教職員がどれだけ子どもたちに「大切な存在」「あなたのことが好き」という言葉がけをしているのか問いかけたくなった。(小)
- ・幼児が、友達のいいところを見つける事例に感動した。「自分が認められている」という感覚・認識が行動などに影響を与えるのかと驚いた。(支)

5 オンラインでのミニ研修

第1部「小学校と就学前施設との『連携・接続』取組状況等調査の結果について」

(当センター職員)

第2部「保幼小連携・接続研究について～第2期1年目の取り組み報告～」

(当センター職員)

第3部「連携・接続」ちょこっと講演

講師：大阪市保育・幼児教育センター所長 阪口 正治

テーマ「子どもの学び・育ちをつなぐ」

実施日：令和3年8月3日 会場：保育・幼児教育センター（オンライン研修）

(1) 第3部「連携・接続」ちょこっと講演の主な内容

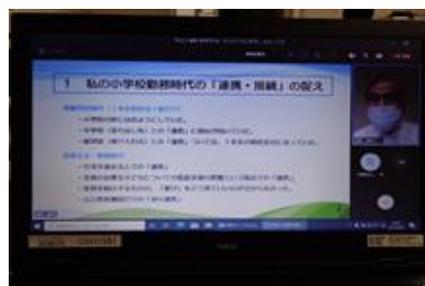
①小学校勤務時代の「連携・接続」の捉え

小学校で担任をしていた時は、ほとんどが高学年で1年生担任は1度だけだった。教科学習や行事、生活指導、保護者対応等に奔走し、就学前の子どもたちの育ちや、そこで行われている教育・保育の内容には、関心が向いていなかった。

教務主任や教頭になってからは、就学に関わる引継ぎに同席したりすることはあっても、就学前の子どもたちがどのような学びをしているのか、就学前施設の先生方がどのように教育・保育をしているのかについては、積極的に知ろうとはしていなかった。

校長になってからは、幼稚園の運動会や入園式に出席したり、保育参観をしたりする機会が増え、

「連携・接続」について、これまでよりは意識するようになった。しかし、中学校との「連携」のイメージはもてても、就学前施設との「連携」を深めるイメージをはっきりもてなかった。



②成長の息吹

「連携」や「接続」について、それまで以上に強く関心をもつようになったのは、孫の育ちを近くで目にし「成長の息吹」を感じたこと、保育・幼児教育センターで幼児教育・保育に関わるようになり、小学校以降の学び・育ちにつながる子どもの姿や、その学び・育ちを援助する保育者の関わりを学ぶことができたからである。

乳児期の子どもの育ちは、休むことのない成長の営みであり、生きるための営みを通して様々なことを学び育っていく。夢中になって周りの環境に関わる中で、生活やその後の関わりに必要な様々なこと（資質・能力）を学び育っていき、世界がどんどん広がっていく。

子どもの学び・育ちは、その後の保育所や幼稚園などの就学前施設で、親という安全基地を離れた集団生活の中で、夢中になる活動「遊び」を通して、さらに興味や関心の対象も、言葉も動きも豊かになっていく。 ※ある幼稚園の一日を紹介

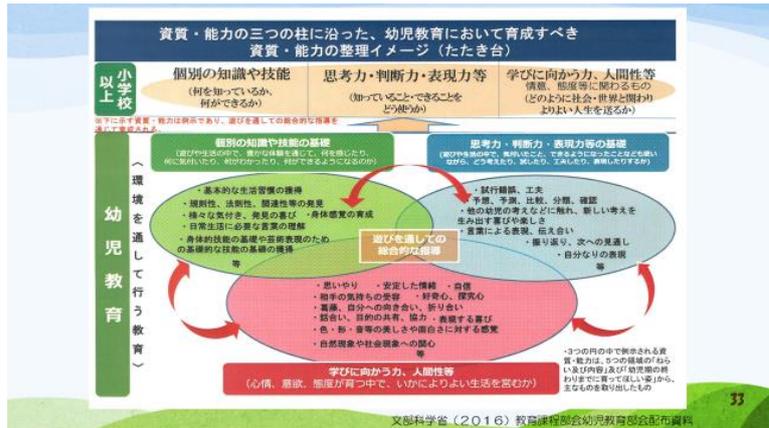
③小学校以降につながる学び・育ちの姿

就学前施設の先生方は、子どもたちが遊びに没頭できるように、その日の教育・保育の「ねらい」や「環境設定」「子どもの働きかけ」の計画を立て、実践を通して検証し、保育を振り返り明日の教育・保育につなげる営みを積み重ねている。

④「幼児期に育みたい資質・能力」を「小学校以降で育成すべき資質・能力」へ

右の図は、新学習指導要請が出される前年（平成28年）に、文部科学省、教育課程部会の幼児教育部会で配布された資料である。資質・能力の3つの柱は「18歳の段階で身に付

けておくべきことは何か」という観点や「義務教育を終える段階で身に付けておくべきことは何か」という観点から、系統的に整理され示されたものである。資質・能力の3つの柱が、幼児教育から小学校以降の教育につながっていることを示している。小学校以降の教育で育成される資質・能力の基礎、生涯にわたる人格形成の基礎につながっていく。



小学校では、昨年度より新学習指導要請が全面実施になり、就学前の学び・育ちを踏まえた教育が求められている中、各校では「連携・接続」に関わる様々な取組をされていることと思う。今一度「連携」の内容を振り返って「子どもの学び・育ちの視点」や「教育の接続の視点」に立って「連携・接続」の取組が一層充実することを願っている。

⑤できそうなことから一つずつ

まずは、「研修会や保育参観の機会を見つけて参加」してみしてほしい。子どもたちが遊んでいる姿や就学前施設の先生方の子どもへの関わり方や込められた願い、そこで育まれている資質・能力について参考になる話が聞けると思う。

「近隣の就学前施設と小学校で合同研修会」の場をもってみて、それぞれの教育を進める中で、就学前施設の先生方が小学校の先生方に聞いてみたいこと、小学校の先生方が就学前施設の先生方に聞いてみたいことなども共有され、相互の子ども理解や教育理解につながる。

「子ども同士の交流」が、招待する・される関係にとどまっていないか見直し、相互のねらいや指導者・保育者の関わりを明確にして共有してみしてほしい。

「スタートカリキュラム」を作成し、就学前施設から1年生に就学してくる子どもたちの就学前の学び・育ちを生かしながら、自己を発揮して小学校での学習や生活がスタートできるように、どの時期にどんな内容の学習や生活を設定するのか教育課程にも明記する取組もぜひ進めてほしい。

「経験を重ねる」という言葉があるが、乳幼児期の子どもたちは、まさしく遊びを通して様々なことを体験・経験しながら色々なことを学び成長していく。この成長を小学校での学習や生活につなげ、さらに豊かに成長していけるようにサポートをすることは、子どもに関わる私たちの役割である。

(2) 研修後のアンケートから (参加人数 9人)

- 理解できたか 肯定的回答 100 %
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 100 %
- 活用できるか 肯定的回答 100 %
- 感想

- ・ 幼児教育で多くの学びを積み重ねて小学校に入学してくるので、先生方の子どもたちへの関わり方や、育まれている資質・能力を知るためにも、研修会や公開保育などに参加し、理解を深められればと思う。
- ・ 大阪市教育振興基本計画にも中心的に示されている幼児教育、幼小連携教育は今後の小学校教育の実践において極めて重要であると認識している。今回の研修で具体的な連携についての実践紹介があり、本校の実態から何ができるのかを考える機会になった。